熊野からの海外渡航者・移住者

柴原健児

一、戦前の海外渡航者と移住者

ふつう「移民」と言われている人々のなかには、数年間、海外に渡って出稼ぎをする人と、そのまま海外に留まって働き、生活し続ける人がいる。使いわけはむつかしいが、前者を渡航者といい、後者を移住者ということにする。

〈海外移住者名簿〉　海外移住者に関する資料のひとつに熊野町役場も協力して作成された広島県海外協会の「海外移住者名簿」（昭和三十八年）がある。これは、戦前移住者名簿、計画渡航による戦後移住者名簿および自費渡航による戦後移住者名簿の三部から成り立っている。このうち、「戦前移住者名簿」には、明治年間から一九四五年の終戦時までに、本県から海外の諸地域（ただし、朝鮮・台湾・樺太・満州・中国・南洋委任統治地を除く）へ移住した県内約一万二五〇〇家族が収録されている。（一部帰国者もいる。）とはいえ、名簿作成のための調査票の回収率が六七％であり、記載もれも相当あるので、実際はこれより更に上まわっていることは間違いない。しかし、アメリカだけでなく、オーストラリア、ブラジルなどの諸地域にわたる調査であること、戦後、社会が安定し、しかも戦前の動向を伺うのによい時期の調査であったことなどから、これを手がかりに、戦前の

熊野町の海外移住者のあとを追ってみることにする。同時に、海外渡航者にも触れてみたい。

ほかに、「熊野町の海外渡航者」（以後、「渡航者」という、熊野町郷土史研究会）、「熊野村（町）出入国人口及び現住戸数」（以後、「出入国人口」という、県統計書など）なども資料として参考にした。

〈熊野町の特色〉　熊野町と隣接する矢野町（海岸部を代表させて）・熊野跡村（内陸部を代表させて）の移住地別に移住者数（その家族員数も）をまとめてみると資料1のようになる。合計をみると矢野町が多い。これに対して熊野町は、総数で矢野町のおよそ二分の一である。人口も熊野町が矢野町よりいつも多いことを考慮するとその割合は、もっと下がる。資料2の大正七年の本籍人口との割合でみてもそのことが言える。

移住先は、矢野町がアメリカ・ハワイが中心であるのに対し、熊野町はブラジル・ハワイに特色をもっている。

資料1　戦前の海外移住者数
（　　）はその家族員数

	熊野町	矢野町	熊野跡村
アメリカ	35 (9)	192 (33)	2 (1)
ハワイ	6 (2)	21 (5)	14 (8)
カナダ	2 (5)	2 (1)	0 (0)
メキシコ	5 (0)	4 (1)	0 (0)
ブラジル	32 (49)	6 (13)	4 (20)
ペルー	3 (2)	1 (0)	1 (0)
その他・南米	1 (0)	1 (0)	0 (0)
フィリピン	0 (0)	0 (0)	4 (4)
オーストラリア	0 (0)	0 (0)	1 (0)
小計	84 (67)	227 (53)	26 (33)
合計	151	280	59

海外移住者名簿より

資料2　安芸郡の在外国人員

	在外国人員（朝鮮・樺太・台湾・関東州を除く）	本籍人口との割合
仁保村	4510人	23%
温品村	317	17
海田市町	726	15
矢野町	337	5
坂村	537	5
奥海田村	189	4
熊野町	191	2

大正8年 県統計書第1編より

最も移住者の少ない熊野跡村は、ハワイ・ブラジル・フィリピンが多い。このように、出身町村による割合や移住先に片寄りが大きい。これは、移住者を送り出した町村の姿勢や移住者自身の経済的理由、また渡航や移住が先に渡航した人からの情報及び呼び寄せによることが多いからだと考えられる。

二、海外で苦労し活躍した熊野出身者

〈ハワイ〉「移住者名簿」によると、熊野町でもっとも早くから渡航先に選ばれているのが、アメリカ・ハワイである。熊野からは、明治十五、十六、十八、十九年にひとりずつ、「出入国人口」では、二十年に男一人、二十一年には男六人女一人が渡航している。それらの人々のなかで「名簿」でアメリカとなっている人も、はじめの何年間かをハワイで働いていた場合が多かったと考えられる。

なぜなら、この頃ハワイから日本に対し、移民誘致の要望や申し入れが強くあり、そのために、明治十四、五（一八八一、二）年には、ハワイ国王やハワイ公使がそれぞれ来日してくるのである。十七年、日本政府は承諾を回答し、翌十八年には政府間で締結された条約と約定書に基づいた契約移民を一〇〇〇人近く乗せた船が二回もホノルルに向けて出航しているのである。このような官約移民が一〇年後の二十七年まで続きその間二六船で三万人近くがハワイに渡っている。（その後は、移民業務が政府から民間に移され、移民取扱人すなわち会社によって行われるのである。）

また国内では、明治十五年からの松方財政によるデフレ政策のため、農村が窮乏していた。海外渡航が煽られていたのもそのためであり、少しでも近いハワイが選ばれたと推定できる。

ハワイでの仕事は、甘庶耕地や製糖工場だった。単純作業で言葉は通じなくてもよいのである。条件を政府間

の最初の約定書によってみると次の通りである。横浜よりホノルルまでの費用は雇用主の負担である。契約期間は三年で、一ヵ月間に二十六日働く。一日の就業時間は、耕地では十時間、工場では十二時間とする。一ヵ月の給料は、男で十五ドルとするとなっている。一〇年後の明治二十九（一八九六）年の民間の契約書で比べてみると一ヵ月十二ドル、人頭税を払うこと、移民取扱人に一〇円払うこととあり、あとは殆んど同じであるが、条件は悪くなっている。

政府の作成した「出稼人趣意書」では、病気をせず勤勉に労働をすれば、三年間に四〇〇円の貯金が可能だといっている。

現実には、その間にも家族への送金が必要であり、帰国費と何がしかの金を用意するには、さらに数年働かねばならなかった。資料3の「在ハワイ国その他仕送表貯蓄金」によると、熊野からのハワイ出稼者は明治二十六年、二十七年、二十八年のそれぞれの年の初めに一〇人、一五人、一一人いた。そしてひとり当り七三円、四六円、八〇円の仕送りをしている。

さらに、明治二十八・九年の「布哇国出稼帰郷者調」をみると、

資料3　在ハワイ国その他仕送表貯蓄金　（熊野村）

	渡航先	年首出稼人口の総数	本年中出稼人総数	本年中本邦仕送金	貯蓄金現在高
明治26年	ハワイ	10人	?	730.52円	310.00円
	その他	12	8	853.00	401.00
明治27年	ハワイ	15	0	687.50	430.10
	その他	17	6	578.00	500.10
明治28年	ハワイ	11	0	※ 885.00	458.50
	その他	15	0	1,521.05	797.82

注　※の数字と明治28年の送金者調の送金額と出稼帰郷者の携帯金額の合計（862円69銭）を比べるとわずかにくい違うがそのままとする。

注　渡航先のその他は、あとで述べるクインスランド、フィジーなどと考えられる。

五名の熊野出身者のうち、渡航前の生計が困難な者三名、困難なしとされている者が二名である。資料4のA・BとC・Dはそれぞれ同じ年・月に渡航し帰郷していることから連れだっての出稼だと考えられる。前者は六年間、後者は三年間働いて帰郷している。普通、契約期間は三年であるから、前者は終了後さらに三年間働いていたことになる。所得金額は前者が六年間で各五〇〇円内外、後者が三年間で各二六〇円内外になる。因みに二十六年頃の熊野村の書記の月俸は三円であった。渡航後は、出稼奨励のためでもあるが、生計困難であった三名も、

資料4　明治二十八、二十九年　布哇国出稼帰郷者調（熊野村）

	渡航年月 帰郷年月	所得金額 送金額	所得金額 帰郷ノ際携帯金額	使用費途 貯蓄	使用費途 不動産又ハ家業用器具買入	使用費途 負債償却	使用費途 雑費	生計 渡航前	生計 渡航後
A	二十二年二月 二十八年十一月	二五〇円	三〇〇	二一五	一八五	五〇	一〇〇	資産少ナキニ依リ困難ス	家屋ヲ有ス帰郷後困難ナシ
B	同右	二〇〇	二五〇	一五〇	一〇〇	五〇	一五〇	左程困難ナシ	左程困難ナシ
C	二十六年五月 二十九年七月	五〇	一五〇	一五〇	五〇	—	—	困難ナシ	困難ナシ
D	同右	一三〇	二〇〇	一二三	七七	—	一三〇	資産ナキニヨリ困難	帰郷後困難ナシ
E	不明（同右か）	一六〇	一一〇	—	一三三	七〇	六七	資産ナキニヨリ困難	帰郷後因難ナシ

困難なしと郡に報告されている。この三名のうち二名は、負債償却には五〇円、七〇円しか当てていない。これは所得金額全体のわずか九%である。一方貯蓄、不動産等に使用された金額は六五%にのぼっているのである。

しかし、ハワイにとどまっている人からの送金額は多様である。二十八、二十九年の合計一三名のうち、渡航前の生計困難者はなんと一二名もいる。その年の送金は、一〇〇円以上二名、五〇円以上三名、五〇円未満六名、

資料5　明治二十八、二十九年　布哇国出稼送金者調（熊野村）

	年	送金額	使用費途 貯金	不動産…	負債償却	雑費	状況
N	28	一〇〇円	—	一〇〇、	—	—	家族ノ者送金前困難送金後善シ
O	〃	七二、三九銭	七二、三九	—	—	—	同
P	〃	五〇、	—	一〇、	—	四〇、	同
Q	〃	五〇、	—	五、	—	四五、	同
R	〃	二七、二七	二七、二七	—	—	—	同
S	〃	一〇、	—	—	—	一〇、	家族ノ者送金前困難送金後亦同ジ
T	〃	三、	—	—	—	三、	同
U	〃	—	—	—	—	—	家族ノ者従来困難
V	〃	—	—	—	—	—	同
W	29	一一八、七五	—	—	一〇〇、	一八、七五	家族ノ者送金前送金後モ困難ナシ
X	〃	三五、八五	—	—	—	三五、八八	家族者従来困難
Y	〃	二〇、	—	—	一〇、	一〇、	家族ノ者送金前困難送金後モ同ジ
Z	〃	二〇、	—	—	二〇、	—	同

送金していない者も二名いる。残留家族にも、生計が「困難」とされているものが七家族もあるのである。

資料3～5から、明治二十八年には、ハワイへの出稼者一一人のうち二人が帰郷していること、しかも家族の者の生活が「困難なし」といわれるほどになるまで送金するかそれだけの金を持ち帰る必要があったことがわかるのである。

しかし、日本からの人数がふえるにつれ、ハワイでは、安い労働力が入ってくるのをきらう人々がいた。一八九七（明治三十）年に、ハワイで日本移民の上陸拒否事件が連続しておきている。一九〇〇年にはペスト予防のためといってホノルルの日本人と中国人の居住区が焼き払われ、日本人だけでも三、六〇〇人が被災する事件がおきている。この年、ハワイはアメリカの準州となり、ハワイでもアメリカの契約移民禁止令が適用された。日本政府も契約移民としての渡航を禁止する措置をとった。

しかし、甘庶耕地・工場の所有者は、むしろ日本人移民を歓迎し、移民取扱人もまた抜け道作りに協力した。日本からの希望者も増加していた。そのためハワイへの渡航者は、年により大きな変化をしながら、明治三十九（一九〇六）年には三万人を超えた。

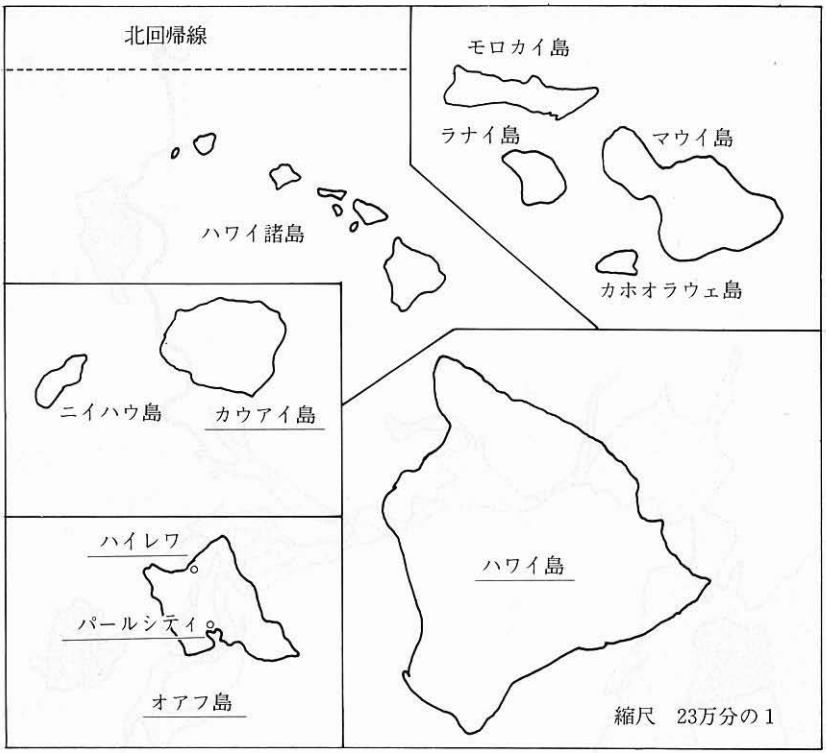
資料6の明治四十年の熊野村海外渡航人員によれば、ハワイは四六名でそのうち女子は四名である。その年のハワイからの送金額は二三〇〇円で、ひとり当り五〇円であり、資料5の二十八、二十九年は四十円弱だったのである。帰郷者は三名おり、ひとり当り二〇〇円を持ち帰っている。また、総所得金額のうち負債償却は九％で二十八、九年とかわらない。しかし貯金及び不動産等購入は八六％と高い割合を示している。

渡航者のなかにはそのまま移住する人もいる。

資料6　明治40年　海外渡航人員（熊野村）

		ハワイ	アメリカ	カナダ	オーストラリア	計
従来渡航人員	男	42	46	10	1	99
	女	4	2	—	—	6
本年度渡航人員	男	—	3	—	—	3
	女	1	1	—	—	2
渡航地出生	男	—	—	——	—	0
	女	1	1	—	—	2
本年帰国人員	男	3	1	—	—	4
	女	—	—	—	—	0
渡航地死亡	男	—	3	—	—	3
	女	—	—	—	—	0
渡航地より送金		46人 2300円	48 2880	10 700	1 150	105 6030
渡航地より持ち帰る		3人 600円	1 250	— —	— —	4 850
計		49人 2900円	49 3130	10 700	1 150	109 6880
所得金使用区分	貯金	1300	2000	400	100	3800
	不動産・器物購入	1200	600	150	20	1970
	負債償却	250	400	100	15	765
	雑費	150	130	50	15	345
計		2900	3130	700	150	6880

ハワイへの移民・移住



下線のある地名は、熊野出身者のいたかいるところ

一九〇九（明治四二）年の「ハワイ島人名録」の中で熊野出身者を探すとオアフ島で次の二名がいた。

① ハレイワ在住　理髪業

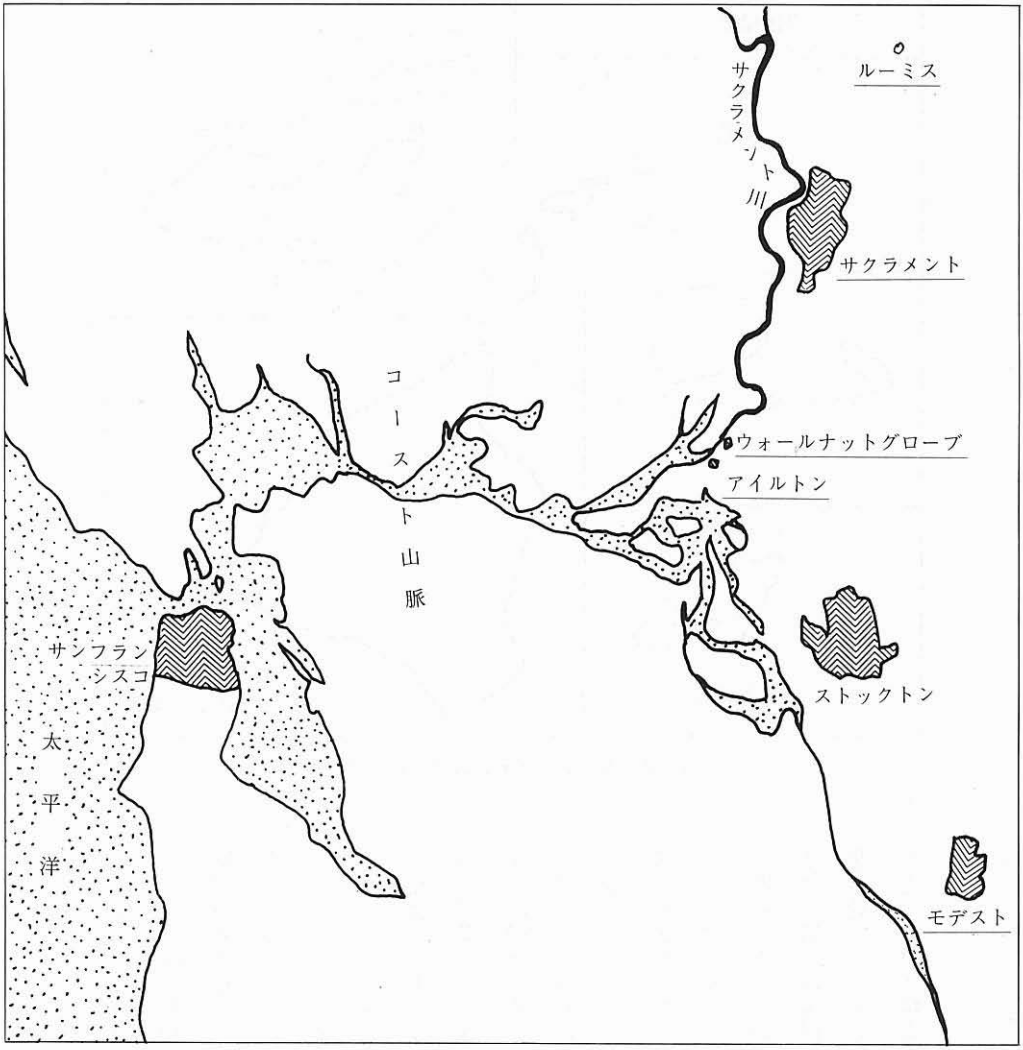
② ポールシチー在住　馬車業

記載もれもあると考えられるが、多くは出稼ぎを中心とする渡航者であった。

そして、さらに新たな飛躍を求めて、アメリカ大陸に渡る人が多かった。

〈カリフォルニア〉一八九七（明治三十）年の大統領選挙では、植民地獲得を擁護した共和党のマッキンレーが当選した。ハワイ併合もこの年で

サクラメント周辺



熊野出身者のいたところにグランド島、タライ島、シャーマン島などがある。これらの島はアイルトンの南、サクラメント川下流にできた中州の発達したところと推定できる。

ある。国内でも産業振興政策がとられ、それ以後、資本家・地主は競って安い労働力を利用しようとした。

アメリカへの日本人渡航者は一八九九（明治三十二）年には三万人を超えた。熊野の人も一九〇〇年頃からふえている。主な渡航先はアメリカ西部のカリフォルニア州であった。熊野出身で、名前のはっきりする渡航者（移住者を含む）は、明治三十一年から三十五年にかけて五名、三十七年から三十九年には六名である。それ以外に三十年代二名がいる。後半は日露戦争による農村の荒廃とその後の不況によるものか、「ハワイから大陸に渡ることを許可したので、明治三十七、三十八、三十九年の三ヶ年は、どの船も六、七百人以上の渡航者があった。明治三十九年には在米日本人七万三千人、明治四十年には八万九百人になった」といわれるように、ハワイからの再渡航者がかなりあったに違いない。

91ページの資料6にあるように、明治四十年のアメリカへの渡航人員は四八人となる。ひとり当り六〇円送金して来ている。ハワイより一〇円多いことになる。また、この年の帰郷者は一人であるが、持ち帰った金額は二五〇円とやはりハワイより多いのである。しかもこの年の渡航者がハワイへは一人であるのに対しアメリカは四人と増加の傾向を示している。

熊野からの渡航・移住者の様子をみると、まず渡航時の年令は二六名中一九名が二〇才以下である。その仕事は鉱夫や果樹園での果実のつみ取り作業などであり、よい金もうけになる仕事を求めて転々とするのである。

また、一定の土地で農業に従事する人も多かった。熊野の多くの人の例でいえば、居住地は海岸山脈とシェラネバダ山脈との間のセントラルバレーにあるサクラメント（カリフォルニアの州都）付近である。大地主や会社から土地を借りて、支配人の指導のもとで指定された作物を請負うのであるが、他に、雇われて決められた仕事

をする農業労働者もいた。日本人労働者は集団（キャンプ）で生活するのである。まかないなどは日本からやってきた女性がしていた。　明治三十年代の作物はビーンズ、アスパラガスが多く、明治四十年代ではそれらに加えて、じゃがいも、アンズ、レモン、セロリと多様になっている。

一方、渡航者に鉱夫や農園労働の仕事を周旋する人や、一時的に宿泊する旅館を経営する人も出てきた。熊野出身者のなかには資金をためて明治四十二年旅館を借り、四十五年には購入してそれらの仕事をしている人もいる。しかし、この人の家族もまた、土地を借りて作物栽培を請負っているのである。このように、自営への道は厳しかった。さらに、日露戦争後、黄禍説が声高に唱えられ、排日運動が激しくなった。明治四十（一九〇七）年になると、日本人土地所有禁止法がカリフォルニア州議会を通過し、日本人の土地所有が禁止され、土地の借地権も三年以内におさえられた。また同年、日米の紳士協約でアメリカへの日本人の移住が制限されてくるのである。それにもかかわらず、その後も熊野からは二十六名が再渡航か呼び寄せという方法で渡ってきている。

しかし、帰国者も多かった。明治四十三（一九一〇）年からの一〇年間（大正九年まで）の調査によると、入国八万八千人、帰国者七万人余を数えている。

そうしたなかで、女子の渡航者が急増してくるのである。日本に帰り、妻をみつけて結婚し、同伴で渡米した場合もあるが、写真で結婚した花嫁を呼び寄せるという方法が多かった。結婚し、家庭をもつということは、移住の第一歩だといえる。熊野からは、明治四十五年から女子の渡航者がふえている。

大正十三（一九二四）年には、排日移民法が施行され、借地権までが奪われた。アメリカ生まれの二世がいれば、その市民権を利用する方法があったが、そうでなければ帰国するか、農村で賃金労働者になるか、都市や鉱

山で仕事を求めるより他になかった。それにもかかわらず、その後も熊野から八家族が渡ってきている。

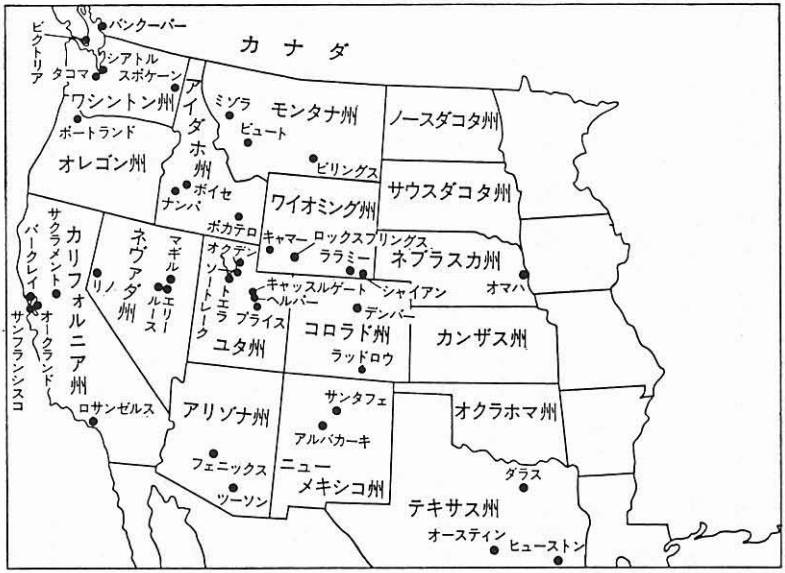
〈アメリカ山岳諸州〉　カリフォルニア・ハワイを除いて、熊野町から渡航者の多いのは、オレゴン州五名、ワイオミング州四名、アイダホ州二名などである。ワイオミング・アイダホ・ユタ・モンタナ・コロラドはロッキー山脈のある州である。オレゴン州はカリフォルニアと並んでそれらの州への西からの入口である。

明治二十年代に渡航し、一九〇〇（明治三十三）年モンタナ州ミゾロ町の病院で亡くなった熊野の人がいる。ミゾロ町は、ノーザンパシフィック鉄道（現在のバーリントン、ノーザン）の主要な拠点であり、しかも近くには金、鉛、銅の鉱山がある。また渡航年次は不明だが、大正九年コロラド州プェブロ近くのフローレンス炭坑でも亡くなっている人がいる。

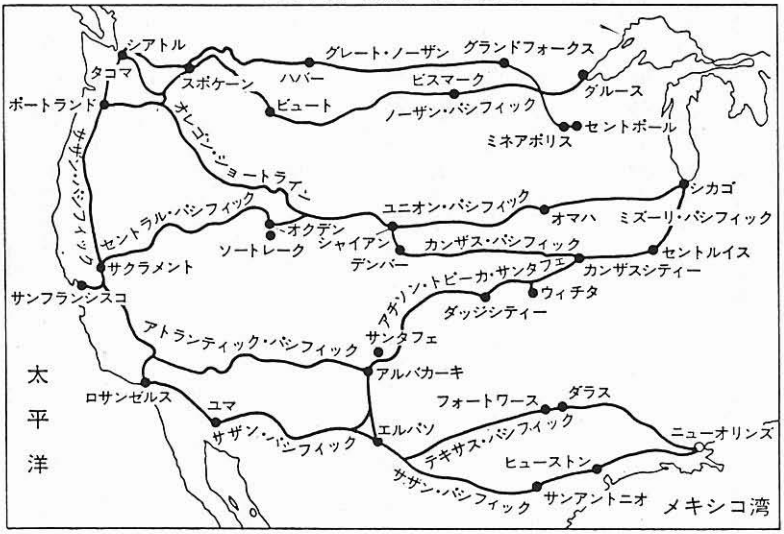
こうしてみると、前の山岳諸州を渡航地にしている人々は鉄道線路の建設か保線または鉱山での労働者であったと考えられる。ここ山岳諸州での鉄道・鉱山の開発は、かつて中国人労働者によってなされていた。しかし、一八八〇（明治十三）年の中国人移民取締条約や一九〇二年の法改正で中国人が完全に締め出された。そのかわりに低賃金でも勤勉に働く日本人が使用者から歓迎されたのである。熊野からのオレゴン・ワイオミング州の合計九名でみると明治三十年代六名、大正年代二名、不明一名である。

ワイオミング州でいえば、ユニオンパシフィック鉄道が通り、同鉄道関連のロックスプリングス（一九〇七年にはここだけで二百人以上の日本人がいた）炭田があり、現在でも主要な鉱産資源をもつ州として知られている。鉄道や鉱山会社は、直属の募集人を沿岸諸港に派遣したり、港や各地の旅館業者に依頼したりして、日本人を集めていた。行先の定まっていない人は、こうした手づるによって無料列車で奥地へ行ったのである。

関係地図



1900年頃の西部の主な鉄道



「アメリカ西部開拓と日本人」 日本放送出版協会

資料7　熊野村(町)の州別アメリカ渡般者人員（戦前のみ）

	海外移住者名簿（昭和38）	海外移住者名簿を除く数			
		加州県人発展史（大正5）	在米広島県人史（昭和4）	南加州広島県人住所録（昭和38）	文書によらない渡航者名簿
カリフォルニア	27	11	6	2	14
ワイオミング	3 明治31 明治37 大正8				1 大正末
オレゴン（シアトル）	3 (2) 明治31 明治34 明治39				3 明治31 ?
クラスカバァーグ※	2 昭和10				
アイダホ	1 明治38				1 大正8
ハワイのちアメリカ					7 6 明治26 明治27 明治28 1 大正初
ユタ					1 明治末
モンタナ					1
コロラド					1
ニューヨーク					1
不明					52
計	61	4	5	2	2
					7
					1
					1
					1
					52

※はバージニアか？

「渡航者」より作成

鉄道労働者は、日本人どうしで組（ギャング）をつくっていた。寝泊りは列車である。給料は十時間労働で一日一ドル二五セントとかなりよい。しかし、仕事は臨時的であったり季節的であったり、労働も単調かつ重労働であった。鉱山でも、日本人は、キャンプで生活し働いている。

このようにみてくると、渡航先の不明者五十二名の大部分は、こうした仕事での出稼者ではなかったかと推測できる。鉄道は移動することが多いため地名を特定しがたく、鉱山は地名より鉱山名が優先するため地名が記録されにくいためである。

カナダへは明治四十年には、一〇人の渡航者がいた。「移住者名簿」によるとバンクーバーへ明治四十一（一九〇八）年に、オンタリオ州へ大正十二年に移住している。名簿以外にも二人の名が知られている。ともにアメリカと同じような仕事をしていたと考えられる。

昭和十六年、太平洋戦争の開始により、アメリカ・カ

資料8　ワイオミング州における中国人・日本人・インディアンの人口

	1890（明23）	1900（明33）	1910（明43）
中国人	465	461	246
日本人	0	293	1,596
インディアン	1,844	1,686	1,486

「アメリカ西部開拓と日本人」より

資料9　鉄道における日本人労働者の就労数

1906（明39）	1909（明42）	1913（大2）	1920（大9）	1930（昭5）
13,000	10,000	4,553	4,300	2,148

「羅府新報」より

ナダ在留の日系人の強制収容がはじまるのである。

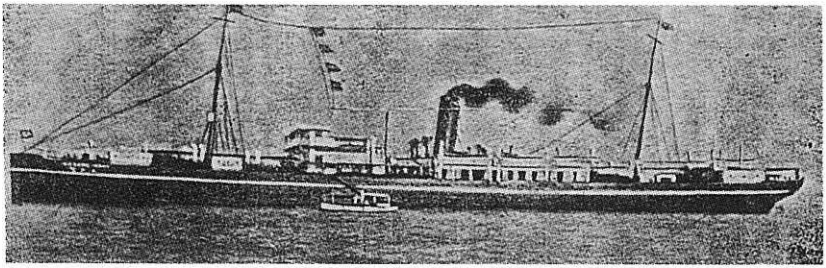
〈オーストラリア・メラネシア〉　海外移住者名簿以外では、オーストラリアのクインスランドやフィジー諸島に出かけている人々がいる。日本吉佐移民会社（のちに日本吉佐移民合名会社と改名）による渡航であり、砂糖きび耕地の労働者としてである。

労働条件は三ヶ年契約、一ヶ月二十六、七日、一日一〇時間労働で、ハワイの場合と似ている。給与は月三〇シリング（一二円前後）で、ほかに三食と家屋、浴場などが雇用主から与えられる。クインスランドへ熊野から行っている人は広島県史によれば、第二回（明治二十六年五月）の広島県人五二〇人中の八人、第四回（二十七年八月）の三一〇人中の三人がいる。別の資料では、明治二十五（一八九二）年に行っている人がいる。その年だとすれば第一回である。そしてその地で二十九年、帰国の年に病没している。三ヶ年契約なので一年延期したのか、出発が二十六年だったのかはっきりしない。遺骨は父親が沖縄まで引き取りに行っている。

フィジーへは、明治二十七（一八九四）年四月の広島県人一〇八人（全国三〇五人）のうち、熊野村三人本庄村一人である。ところが、「最初の二、三ヶ月は七円五十銭の送金もあり、順調であったが、十月より赤痢や脚気、熱気・熱病のため死者や重病人が続出し、同年末にはひじょうに悲惨な状態になった」（県史）という。「移民会社は…明治二八年一月日本郵船の雇船『アフガン号』で…全員を引き揚げさせた。しかし多くの犠牲者を出し、広島県人では現地で二十五人（全国八十一人）船中九人（二十五人）上陸後二人（五人）の死者が出て、無事帰郷した者は七十二人に過ぎず、三分の一は死亡している」（同）この結果をみれば、熊野町関係者からも犠牲者が出ていたに違いない。渡航者には労苦が多かったのである。

フランス領ニューカレドニアも同じように労働条件が悪かった。東洋移民合資会社の手により一九〇〇年から一九〇五年にかけて三一三人が渡っている。熊野町からも少なくとも一人が一九〇〇、〇一年に行っている。仕事はニッケル会社所有の鉱山での労働であった。

〈ブラジル〉　アメリカへの渡航がむずかしくなった明治四十一（一九〇八）年から、ブラジルへの渡航がはじまった。サンパウロ政府と契約した皇国植民合資会社によるものだった。第一回の船は、総勢七八一人を乗せた笠戸丸だった。船は、神戸港を出発し、インド洋を通り、二ヵ月かけて六月十八日、サントス港に着いた。労働条件の悪さから今までできていたイタリア移民もブラジルをさけるようになったあげくの日本移民である。このなかにも熊野出身者が二名（広島県は四二人）いた。移民の条件は家族を同伴することだった。熊野の二人は独身者だったので、ほかの家族に含められての入植（コロノ）である。広島県人は、熊本・宮城・山形・新潟など五〇家族及び独身者の二一九人といっしょに「センタヲンジニョ」郡のデュモント耕地に入植することになった。この耕地は、ロンドンに本社をもつ会社（ファゼンディ）の所有である。面積は五、〇〇〇アルケリス（一万二一五〇町歩）、コーヒーの株数四五〇万本、労働者は家族と日傭労働者を合わせて五、〇〇〇人余である。



第１回移民を輸送した笠戸丸　「ブラジル年鑑」より

寝起きする部屋は、とうもろこしの殻や枯草を敷いた土間であった。最初の仕事は、コーヒーの実の採取である。しかし、慣れないことと、道具の不揃い、時期おくれ（五月に始まり、九月に終るのが普通）で成績はあがらなかった。借金はふえ、不平はつのった。その結果、この耕地での日本移民は交渉のすえ、よりよい条件の耕地へ移動したといわれている。また、ひとまず移民収容所に全員引き揚げたともいわれている。

このような状態だったから、翌年のブラジルへの渡航者はわずかであった。しかし、その翌年には復活し、その後の大正二（一九一三）年と七年に山を作りながら推移している。これはコーヒー労働に慣れるに従い成績も向上したことと開墾費も支給される等、条件も良くなってきたことが理由と考えられる。この頃の渡航者数は左の通りである。

資料10　ブラジルへの渡航者

	一九一二(明45)	一九一三(大2)	一九一四(大3)	一九一四(大3末)
広島県	五三九	一一〇一	四九九	二三八六
熊野町	一〇	二	九	?

第10回移民より

その後で熊野出身者が多くなるのは、大正十三（一九二四）年、十四年、十五年である。それぞれ、七・七・十六人である。第一次世界大戦後の不況にともなう農村の貧窮化に対応して、日本政府がブラジル移民を奨励し、渡航費を全額負担するといった積極策をとったからでもある。しかし、世界恐慌の昭和五（一九三〇）年、六年

は二人、一人と少ない。この頃になると広島県の移民県としての地位も沖縄・熊本に譲って第三位である。

昭和八（一九三三）年六月発行のブラジル年鑑の住所録で熊野町出身者を調べると、表の二〇名がわかる。熊野出身者はひとりを除いて全て農業従事者である。また、住所はサンパウロ州中心である。地域の特色を鉄道沿線で分けてみるとサンパウロ付近は借地農が多く、ノロエステ線はノーバアアリアンサを除けば独立・請負が多い。ソロカバナ線は独立農が多く、モジアナ線は日本人以外の所有になる耕地が多く、当時日本人たちの間で「コロノの学校」といわれたようにコロノが多い。作物にしても、サンパウロ付近は近郊農業の特色をみせている。熊野出身者の三家族は、じゃがいもを作っている。表の①の人はこの地区で最大の耕地をもち、⑧の人はコチア産業組合（一九二八年）設立及びその育成に貢献した。ノロエステ・ソロカバナ線では、コーヒー栽培がほとんどであり、独立農として二万本のコーヒーを栽培している熊野出身者もいる。ソロカバナ線最大の日系移住地バストスでは、日系人による商業、運送業、工業が盛んであり、病院・日伯学校もある。旅館も三軒あり、そのうち一軒は、熊野出身者が経営していた。

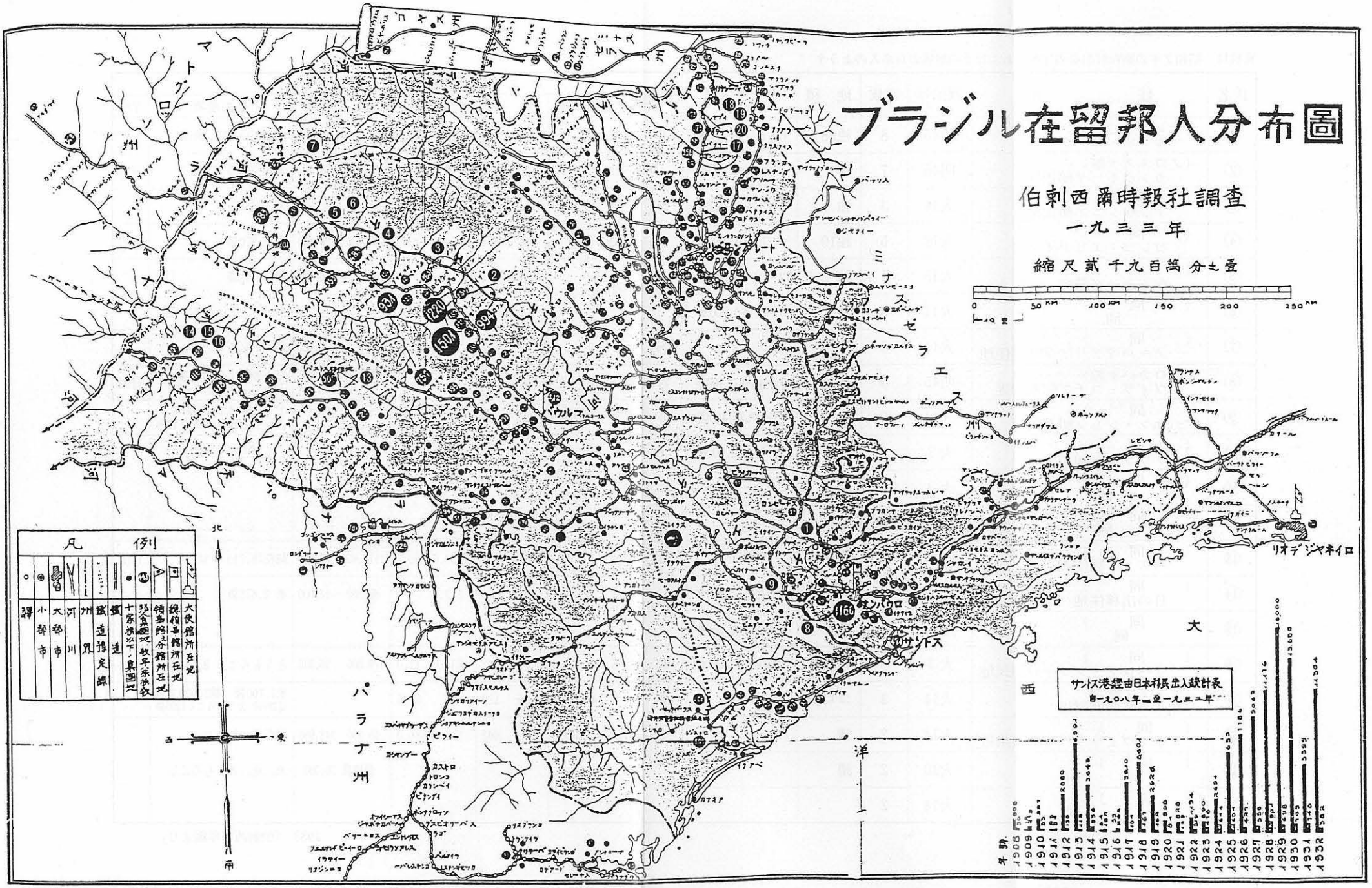
このブラジルでも、世界恐慌の吹きすさぶなかで、コーヒーが大きな打撃を受けた。失業者の増大とともに、憲法に移民制限条項が盛りこまれた。その鉾先は日本人移民に対してであった。

さらに第二次世界大戦が始まると、日系人は団体活動を全面的に禁止され、県人相互の連絡も途絶した。さらに昭和十七（一九四二）年、日本とブラジルの国交が断絶され、日系人は集会、日本語使用、新聞・雑誌の発行等を禁止され、また故なく投獄されることもあり、苦難の時代を迎えることとなった。翌十八年には、サントス市や海岸地帯の日本人は退去命令を受けるのである。

資料11　昭和７年の熊野町出身者住所録およびその地域の日系人のようす

氏名	住所	渡伯年	家族	地積	主ナル生産	左の地域の日系人のようす															
						独立	借地	請負	コロノ	他	男	女	面積(エーカー)所有	面積(エーカー)借地	コーヒー(本)所有	コーヒー(本)請負	主要生産物	学校
①	(サンパウロ付近) カンポ・リンポ	明45	8	独28	じゃがいも1,500袋	6	18	0	0	0	66	56	67.0	54.0			じゃがいも13,490袋	
②	(ノロエステ線) カンポネーザ植民地	明45	7	請	コーヒー5,000本	4	0	23	0	4	94	86	65.0		23,000	161,600	米14,760袋	日伯
③	(　同　) アンチンニア植民地	大14	3	独 7	コーヒー7,000本	35	0	37	14	0	254	255	362.0		404,500	232,200	米 7,865袋	
④	(　同　) コレゴ・エリゼオス区	大12	5	独10	コーヒー10,000本	59	0	39	5	15	368	321	70.5	23.0	741,400	209,900	米 3,770袋	日伯
⑤	(　同　) ケシャーダ耕地	大15	4	独 2.5	コーヒー5,000本	(3)		5 (2)			13	11				26,000	米　62袋	
⑥	(　同　) 同	大14	3	独 2	コーヒー4,000本												トマト，とうもろこし	
⑦	(　同　) ノーバアアリアンサ移住地	大14	8	独10	米	26	1	1	0	0	58	55	300.0	3.0		6,000	米	
⑧	(ソロカバナ線) ヴィラ・コチア駅及附近	明45	8	独21	じゃがいも1,100袋	21	132	0	0	11	498	397	554.0	577.5			じゃがいも94,740袋 トマト，とうもろこし	日伯
⑨	(　同　) サン・ジョン駅及附近	大14	5	借 3	じゃがいも400袋	3	5	0	0	0	21	25	135.0	8.5			じゃがいも7,100袋 とうもろこし，たまねぎ	
⑩	(　同　) ドウラドン植民地	大 3	9	独20	コーヒー20,000袋	4	0	0	1	0	19	18	51.0		65,000		とうもろこし 550袋	
⑪	(　同　) 同	大 3	2	独11	コーヒー11,000本													
⑫	(　同　) 同	大15	2	コロノ														
⑬	(　同　) バストス移住地	明45	8	旅館業		390	9	34	9	65	1588	1394	5523.0	50.0	1178,650	23,890	綿花78,710 アロ	日伯
⑭	(　同　) 日の出移住地	昭 4	4	独30	コーヒー12,000本	15	0	4	1		65	51	243.0		89,560	17,000	米 2,675袋	
⑮	(　同　) 同	大14	6	独10	コーヒー 5,000本													
⑯	(　同　) リベロン・クラーロ植民地	大 3	8	独10	コーヒー8,000本	20	3	6	1	1	74	62	331.0	11.0	179,000	26,300	とうもろこし 8,288袋	日伯
⑰	(モジアナ線) グアラ駅及附近	大14	3	コロノ		0	7	0	49	0	109	132		84.5			米1,760袋　綿2,500アロ 豆200袋 とうもろこし1205袋	
⑱	(　同　) イツヴェラーヴァ駅及附近	大14	3	請		5	67	65	102	9	718	662	117.5	686.0	65,000	342,950	綿花26,938アロ	
⑲	(　同　) 同	大10	2	請											借地農 20,000		米，豆，とうもろこし	
⑳	(　同　) 同	大14	2															

1933 「伯剌西爾年鑑より」


ブラジル在留邦人分布圖
伯剌西爾時報社調査
一九三三年
縮尺貳千九百萬分之壹
0 50 100 150 200 250
凡例
大使館所在地
領事館所在地
領事館所在地
十家族以下一集團
教育家族數
州界
河川
鐵道
鐵道延長線
大都市
小都市
サンパウロ
サントス
リオデジャネイロ
パラナ州
大西洋
サントス港經由日本移民出入統計表
自一九〇八年至一九三二年
年別
1908
1909
1910
1911
1912
1913
1914
1915
1916
1917
1918
1919
1920
1921
1922
1923
1924
1925
1926
1927
1928
1929
1930
1931
1932

〈メキシコ・ペルー〉　ラテンアメリカでは、ブラジルに次いでメキシコが多い。「名簿」で五名、ほかの資料で三名の熊野出身者がわかっている。「名簿」でメキシコを渡航先にしている人は、ソロラ（正しくはソノラ）州となっている。渡航年次は明治三十二年（一八九九）年がひとり、あとは明治の四十年代である。このソノラ州を当時の「移民調査報告」でみると、大陸植民会社の手による黒山金坑の労働者としての移民がでてくる。この金坑はアメリカ資本によるもので、住居はテント張り、一張りに四～六人の共同生活である。賃金は普通一日二～三ドルでとても恵まれている。しかし、これらの人々も、はじめはベラクルス州のオハケニア耕地の砂糖きび労働者か、ハリスコ州のツスバン以西の鉄道労働者であり、のちこの地にやってきたと推定できる。ほかに、当時メキシコ在留一〇年あまりの人もいた。

ペルーへの渡航は、「名簿」に三名が記されており、首都リマの北西にある太平洋岸の都市トルヒーヨである。多分その郊外にあった耕地での砂糖きび労働者であったと考えられる。

また、アルゼンチンのブエノスアイレスには、大正七（一九一八）年に渡り、現在でも消息のわかる人がいる。

〈その他〉「名簿」以外であるが、フィリピンがある。明治三十九（一九〇六）年マニラで死亡した人のほかに二名が知られている。

フィリピンへといえば、明治三十六年ベンゲット道路工事労務者として日本人一、五〇〇人が渡航していたのである。

三、海外植民地への渡航・移住

明治二十八（一八九四）年四月、日本は清と講和条約を調印し、台湾を領有した。また三十八年九月、ロシア

と講和条約を調印し、南サハリン・遼東（関東州）租借権などを獲得した。同時に、ロシアに韓国保護の権限が日本にあることを承認させたのである。そして、四十三年八月、韓国併合に関する日韓条約を調印した。

ここに、大正一〇（一九二一）年までの熊野村（町）の出入人口の統計がある。

資料12　熊野村(町)出入人口及び現住戸数より

	在外国		台湾		在カラフト		朝鮮		関東州		男	女	計
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女			
明治20年	1	0									1	0	1
21	6	1									6	1	7
22	*												
23	*												
24	*												
25	*												
26	*												
27	*												
28	*												
29	*												
30	31	0									31	0	31
31	*												
32	103	5									103	5	108
33	133	5									133	5	138
34	92	3									92	3	95
35	*												
36	102	4									102	4	106
37	83	4	1	0							84	4	88
38	86	3	2	1							88	4	92
39	88	6	2	0							90	6	96
40	99	6	3	0							102	6	108
41	96	5	2	1							98	6	104
42	93	4	1	1							94	5	99
43	88	2	3	4	1	0	6	2			98	8	106
44	86	3	3	4	1	0	7	2			97	9	106
45	85	13	8	2	2	1	10	9			105	25	130
大正2	※219	47	8	2	0	0	12	11			239	60	299
3	208	45	5	2	0	0	8	5			221	52	273
4	198	42	14	6	0	0	7	4			219	52	271
5	187	40	12	7	0	0	5	3			204	50	254
6	181	47	13	9	0	0	8	3			202	59	261
7	133	64	12	17	0	0	9	6	2	0	156	87	243
8	130	61	11	17	0	0	8	6	2	0	151	84	235
9	138	65	10	18	0	0	6	5	3	0	157	88	245
10	145	73	17	14	0	0	3	6	3	0	165	93	258

※　急増している理由はよくわからない。　　＊資料なし

日本領有のもっとも早い台湾には、明治三十七年から熊野出身者が渡航・移住している。四十三年から男三人・女四人、四十五年には男八人・女二人と減少する年もあるが全体として年々増加している。これは、四十二年から大正六年までの台湾官営農業移民事業と深い関係があると考えられる。

熊野村から朝鮮への渡航・移住は、明治四十三年の男六人・女二人からである。朝鮮も四十二年から東洋拓殖㈱による農業移民が始まり、それとの関係も予想されるが、筆の原料の仕入れおよび販売なども理由として考えられる。

日本全体としては、大正二年台湾に一三万四〇〇〇人、朝鮮に二四万人といわれている。熊野村の場合、前者が一〇人、後者が二三人でやや朝鮮に比重がかかっていたといえる。

カラフトは、四十三年から四十五年までの一時期一人ないし三人が渡航している。関東州には大正七年から男二人が渡航し、移住している。

参考資料

ブラジルを直視して　海外興業株式会社発行　昭和四年
伯剌西爾年鑑　伯剌西爾時報社編　一九三三年
海外移住者名簿　広島県海外協会　昭和三十八年
ハワイ日本人移民史　ハワイ日本人移民史刊行委員会　一九六四年
ブラジル広島県人発展史並びに県人名簿　ブラジル広島県人会　昭和四十二年
排日の歴史（アメリカにおける日本人移民）　若槻泰雄　中央公論社　昭和四十七年

広島県史　近代現代資料編Ⅲ　広島県　昭和五十一年
アメリカ西部開拓と日本人　鶴谷　寿　ＮＨＫブックス　昭和五十二年
歴史公論１（近代百年と移民）　雄山閣　昭和五十四年
ジャパニーズ・アメリカン　Ｒ・ウィルソン、Ｂ・ホソカワ著　有斐閣　昭和五十七年
移民の日本回帰運動　前山　隆　ＮＨＫブックス　昭和五十七年
熊野町の海外渡航者　熊野町郷土史研究会　昭和五十八年
在米広島県人史　竹内順一　昭和四年
広島県史近代　１　広島県　昭和五十五年
熊野村関係資料

他に資料、またはお気付きの点があればご教示ください。また広島市などの移民関係の資料が公開され次第、それをもとに加筆、訂正します。